

沖縄へ 吉野川からエール

沖縄辺野古の新基地建設をめぐる県民投票が、やっと今月 24 日に全県で実施される
ことが決まった。2000 年 1 月に実施された吉野川可動堰建設の是非を問う住民投票が
思い起こされる。写真の朝日新聞 1 月 30 日を紹介したい。

リードから一米軍普天間飛行場の名護
市辺野古への移設計画をめぐる県民投票
を前に、19 年前に徳島県・吉野川可動堰
建設を巡る住民投票に取り組んだ市民ら
が「沖縄県民投票を勝手に応援する会」
(OKOK) を結成した。当時の中心メンバ
ーで、OKOK を立ち上げた住友達也さん
(61) に思いを聞いた。



@住友さんの発言を抜粋して紹介する。

「昨年末、徳島で沖縄の地元紙記者から取材を受けたことがきっかけの一つ。沖縄県
民投票は日本全体の問題だ。沖縄は孤立していないんだよ、という思いが伝わればいい
と考えた」

「吉野川の時のように、現地でプラカードを持って投票を呼びかける。当時のデザイ
ンを手がけたメンバーで、ポスターやプラカード計 2 千枚を市民グループに寄贈する。
現地の市民グループと意見交換もする」

「真冬で一番寒いから投票率も下がるだろうと思われた 1 月 23 日の投票日も、逆手
に取った。投票を呼びかけるデザイン『123』が完成。したたかでしょう」

「『反対運動』を作るのではなく、あなたはどうか考えますか、と投げかけられるよう
に国からも情報を引き出し、自分たちも勉強して、住民に提供することができた。向き
合ったのは国や建設省（現・国土交通省）ではなく住民だった」

「辺野古問題のように重要なテーマは直接投票をするべきなのではないか、と吉野川
を通して思うようになった。おまかせ民主主義ではなく、重要な案件は直接投票する
ということが、民主主義のあり方として重要なのではないか。現実はなかなか思い通り
にはならないし、面倒だと思うこともある。けれども自分の責任で地域や国のありようを
決めなければいけない。それが、住民投票から教えてもらったことだ」

(2019 年 2 月 3 日)